



伊13
1833
#44

1833
44

繪本古圖記に篇卷之八

目録

柴田勝家小園乱入話

羽柴茂元守三法師君の御と心圖

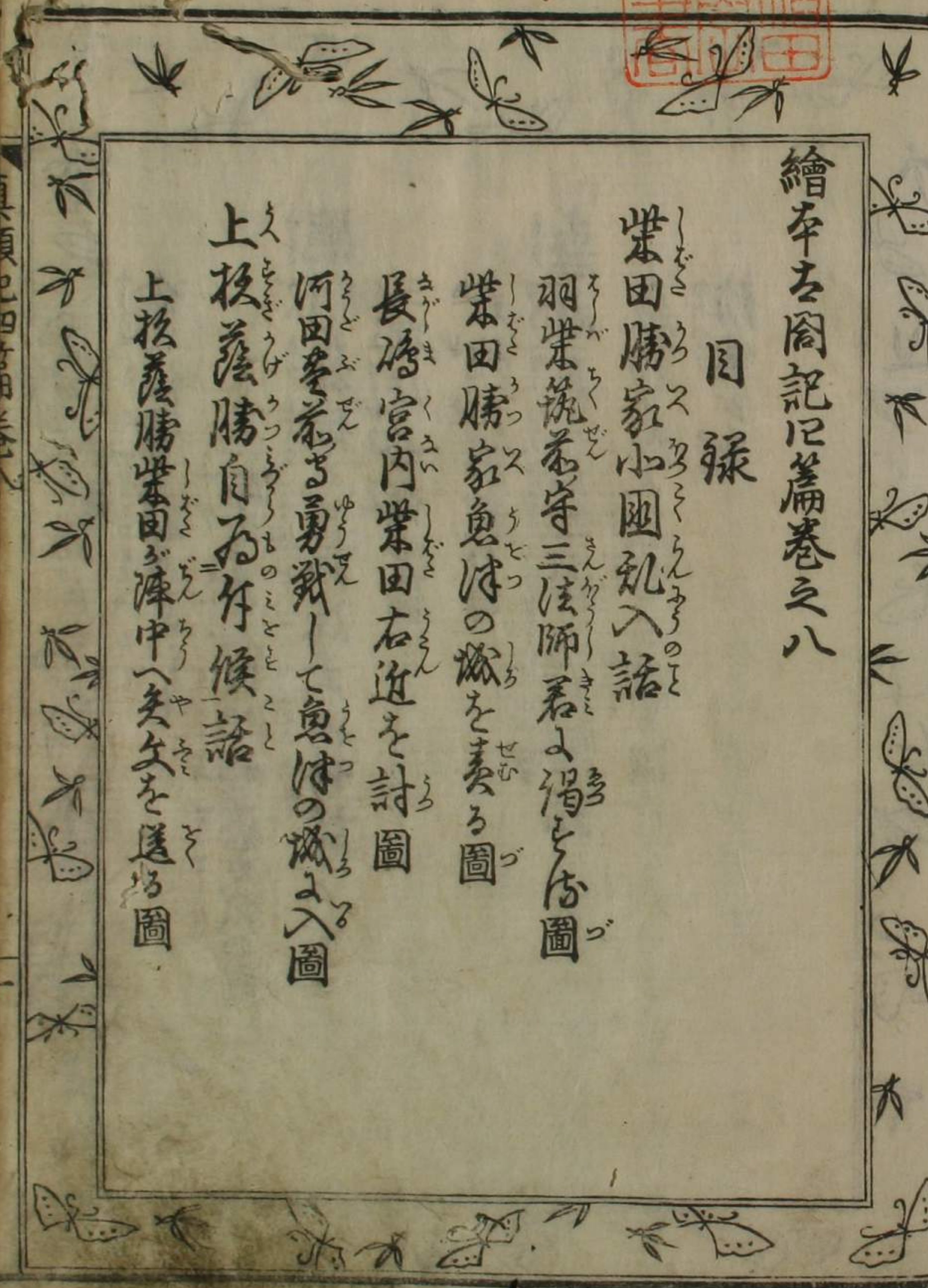
柴田勝家魚付の城を奏る圖

長崎宮内柴田右近を討圖

河田冬元と勇裁して魚付の城に入圖

上杉藤勝自刃の候話

上杉藤勝柴田の陣中へ矢文を送る圖



倉田依吾允松幸外紀考と

井筒隼人日刑部丞方鏡の圖

隴川森丸入三國作大田切話

三國作合鏡の圖

森川合鏡の圖

森勝翁大田切破上扱勢話

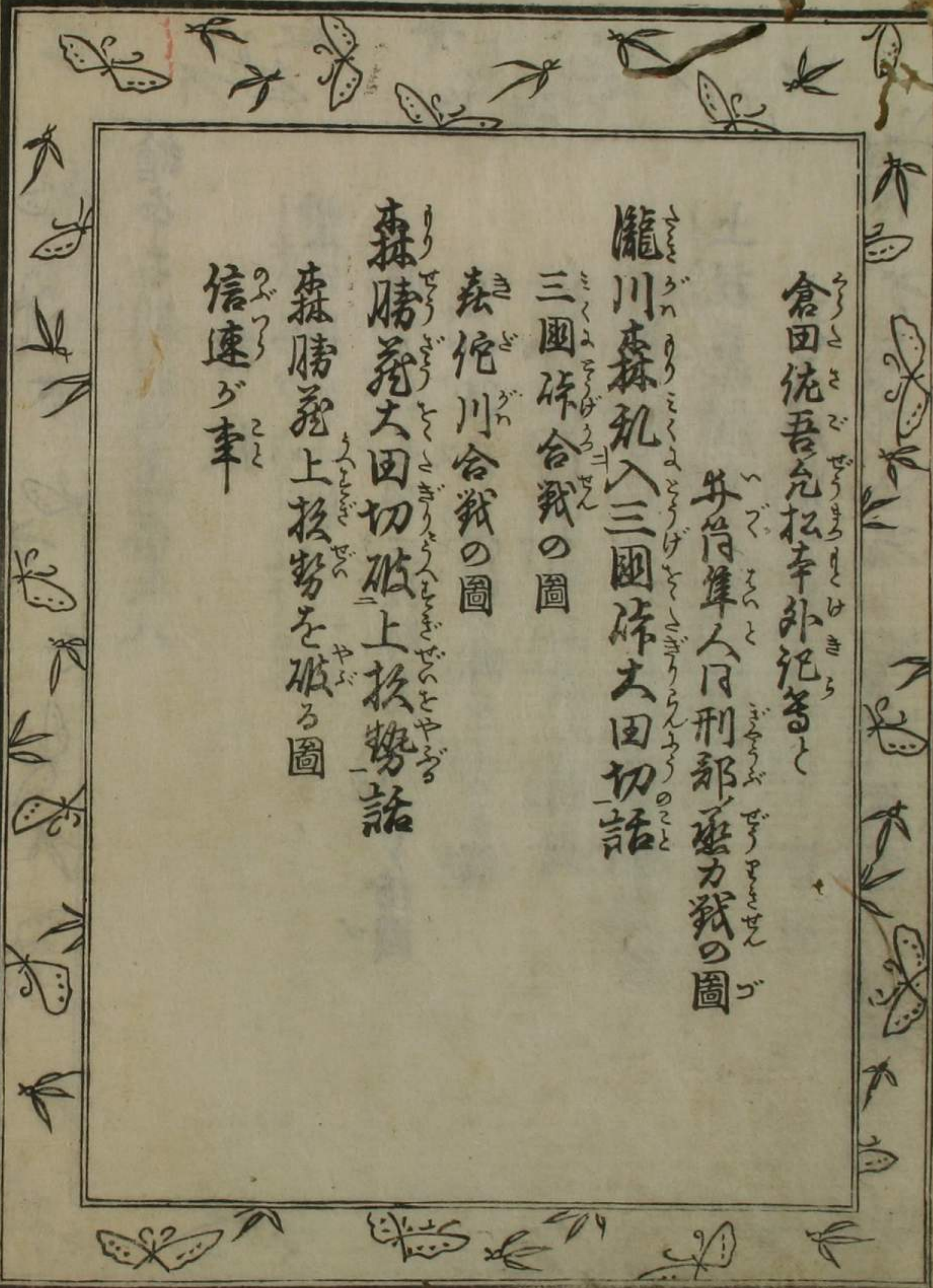
森勝翁上扱勢を破る圖

信速が事

繪本右圖記に篇卷之八

柴田勝家小國丸入

天正十年六月十八日羽柴筑前守秀吉本領寺に到り先君御座
 命の既不易の御遺骨と御下き物を悉く拾ひ収め由尾列傳
 洲下向如給ひ三法師殿を拜謁光秀を誅伐せ有委細言よ
 及び暫く滞遊てぞおけ給け給け三法師殿より敵中お信忠御
 の所長よりて濃別は阜に御座るが去る六月二日茶田云以法印
 信忠御の遺命を承りて破阜の城より御簾中並に三法師殿
 を御伏物なり尾及濃別は後系を堅固に守護をりけ云以
 敏の後徳善院法印と稱す者又なる一人之家と柴田修理進勝
 家と云るに月信長云甲斐の武田一家誅伐迄御諸お各恩出云行



真言口々存卷八

二

羽柴勝家、小園の藩詰と、城後園を編りたるに、勝家小
 園を互陣にて上板彈正が、羽柴勝と合戦と、捲る小園、上板薩勝の
 若年と、つとも、故入る徳信の威勇と、終隣國悉く、乞が幕下に、属
 十武勇の、お士堅固の守護、これ、容易に、退治、如、難く、小園家の
 功臣、佐々摩惠多、瀧川森が、安路、勝家、力を、合せ、圍く、乃、軍
 勢を、修、諸方より、討、一、上、板を、切、其、用、先、柴田勝家、佐々
 先、柴田勝家、佐々、陸奥守、佐々、摩惠多、攻、門、多、家、佐、久、同、去、番
 改、登、改、柴田、佐、守、勝、等、と、佐、城、中、より、攻、入、森、勝、長、一、後、漢
 より、大、回、切、口、龍、川、た、所、所、置、一、番、勝、の、後、ま、い、派、田、より、三、國、作、一
 録、城、後、丸、入、せ、上、板、薩、勝、の、志、目、山、の、幸、機、ま、在、て、け、り、を
 上、諸、の、虎、口、一、美、の、勢、を、合、せ、て、小、回、の、軍、と、ま、ん、と、は、勝、家、の、

羽柴勝家
 三法師居り
 備とる園



真田巴田守

新田勝家 奥津の國を攻る



ういふ派中表松倉の城より河田を新守日國奥津の城より吉に越部
 正城より其外戸山末登等の城に加勢して吉に越部即中表派新
 守寺橋より新吉の河津入る竹股三河守長と治をばめり侍大の
 十三人軍勢僅より二百人勝家が軍兵に都合に万々人地に備ふに
 憂り兵潮の激おしく押せし叶ふにしも月々り多きはよめて上
 松方の諸お會合て軍後を伴定らる味方僅なる小勢を以て
 不の城よりち款の大軍に當らんゆかり思ひもよけし戸山
 末登の末城を打捨て奥津の城にしが今城限りにはあべに松倉
 の城にけ候は抱へ墨款の勢を分城させたる後治の候は長にまき叶
 ざる耐は候も打捨て城より河田を新守魚津の城に籠り力を合せて
 防戦と長に款の案固知ぬ地國の勢味方自國の兵地理は懸し

彼方宮城に方々我軍の是日天地無隔の是別あし敵軍
易く無く合戦得ては是を我軍に送る内兵
糧運送の役を多し人馬ももつらば其時後浩の勢を結交西方
より是校と切てうらば敵いふ小大軍ともお崩さてあえきやお率
領は英軍の道に魚津松倉を堅固守り敵の要ると結
居る時天正十年に月上旬柴田佐久回佐々摩意多若に方々
多余人敵軍お入上坂方の捨置る戸の城に佐々成政が軍兵を
止め敵お差勝後浩せん時打破るべきお配は備無勢魚津松倉の
西端を後福の如く丸圍と息をも絶せは妻よりあしは敵後
勢又は窓より等さなく矢石お放し鉄砲放ら敵軍防戦あ
るに容易に落しき様をさし割し十月の夜は是に即ち勢を

引て城をむびゆく敵陣を夜討し鳴り叫ぶ妻はこれいふ事
逢をまいせんぐよ敵軍に時勝あが後柴田右近をい法に即
が師長後宮内と我して討記陽記の者三百余人敵兵に思ふ
預戦いしくも城にお入る小柴田佐久を込めあまの諸將及啞ん
でいふ多うけいしをさすうと敵の音は伝せしんと妻口をせし
退き大軍いしと陣をつら英軍もやじ旗旗天にいさう軍
卒の首をたいて勇威を破し其攻よこをさすう時上坂陣
正少弼差勝り春日山まあけいうとす後浩せん魚津松倉の西
城防戦難儀なるじとを先にして上条孫八郎敵軍中村吉河回
軍兵清石勅と敵軍一多余人魚津をとりて後柴田柴田勝家を
はて軍勢を二にわくら後浩の勢に白し陣を築き去るを築き竹



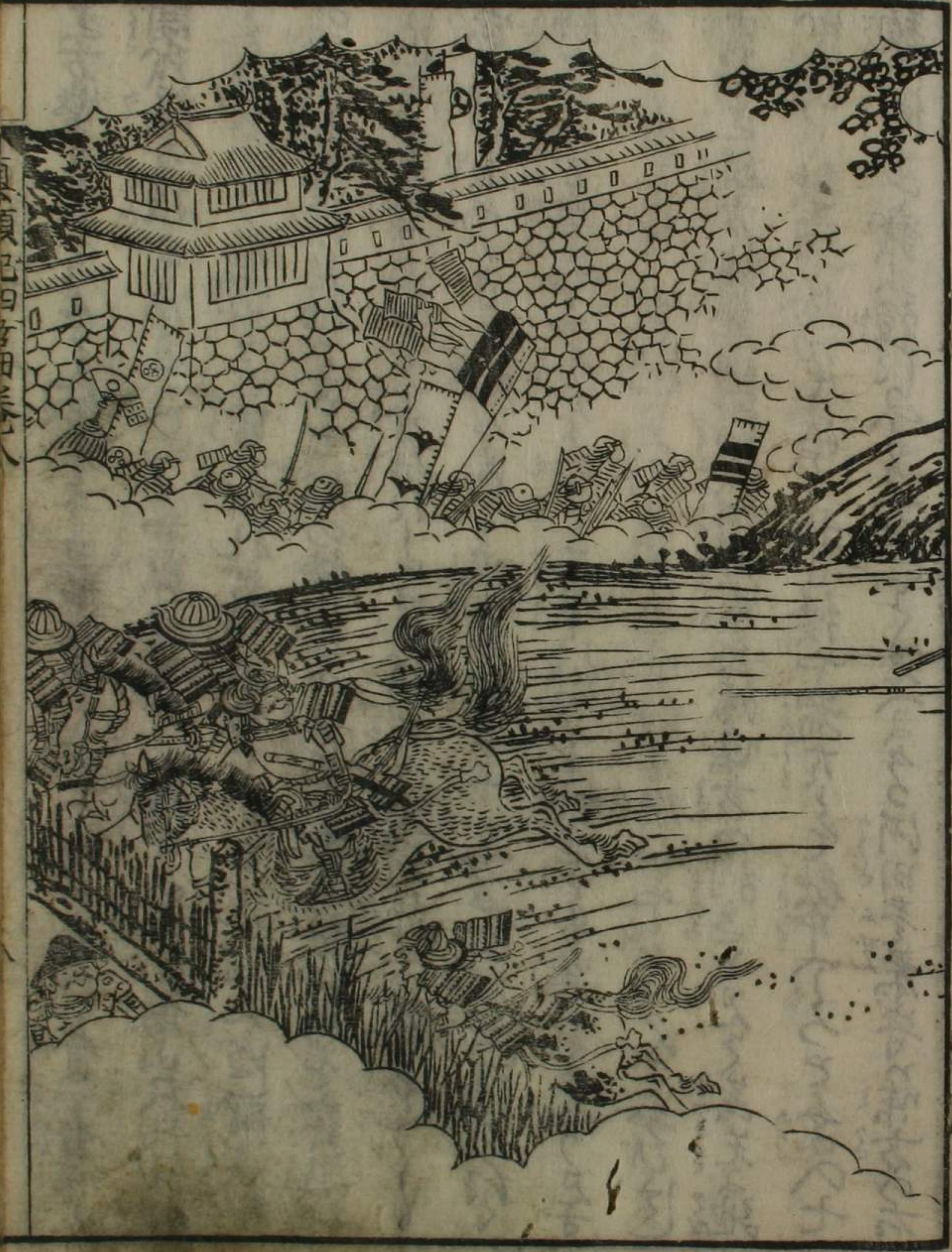
長崎宮内
柴田右近を
討つ
圖

真蹟記四巻八

五

東不実更刀箠を極柵を振り堅固は陣をええとれは城中より
出て出きも柵のりく考も敵て美無く人き等もあつて兵食攻
まじき極換之れは松倉の城は籠りし大石河田を寄るはぐと敵
味方の配勢を考る小安もいふ万騎の大軍味方後ま三人いふ防ぎ
敵もも始終の勝利心えは其と敵兵魚付の城を強く固くは城を
申る兵士又いふいふにけしけし守りて敵の勢を減せしとて
ありは後守り魚付の居城を泳り居るも勇まき不おかりは
不登は城を捨く後信の勢と東敵石動と一もたり候上然
勝利を得るは但敵陣を切破て魚付の城は通入味方不利なま記
を候まはしと思ひ定め城中の勢九百人一人文字に突て出陣あると
一方に切懸け山渡を地通り宮宿の後信の陣と東孫次郎が城入

まで一軍に通入りつとけしは取勢之根と東石動母辰多に對面
てやうなけ度我々籠城のじや合世の系松倉の城は抑ひは始終の
首尾合らざるは魚付(二)に籠りしと吉に織部守をばしは傍軍の
諸士と密く契約を中ては城も今其河小遠い魚付の城中危難
及ぶ所もあくる余はに泳りて是河へんは幸も小わたりは候一戦
一先陣く敵中を切懸城中へいんとえ候はし柵も松倉の城を
切て出てもいふ我々力を合せ合戦候くあはしと梅ひはでやうな
系孫次郎を首と寄るも是の形大敵の陣の中をつらあはれ
切懸城中へいん危きのは強ひと河川探り止まらば河回殺て
如しせば諸おけし力は強らば我を候一戦はしとて日月二十日
と系孫次郎をえりして味方の陣を八つおちあするの陣押懸る



河田を以て
勇戦して
奥津の
城を
入国

真言宗の御書

上方勢も老を以て城を十三版より旗を進め陣五千の夜啼と
周所揚る種を以て実へてお城の軍田方城中のす小徳山又兵備
と云者あり物訓する勇言れい敵の小勢を以て包ん討たは
の軍を心懐れ抱かろぞ槍の穂先を操へて果て敵の馬を突強も
じたる武者どもを突捨りて首級を以て後引弱兵の味方へも
実報せ進めくと知を以て味方の中を十文字に築也地は向く
砌せは上方勢も老を以て勇を以て切せども実もうり守
邊へ夜を以て我に大山も崩れ合戦も輝けやとんとおびに
家系と枚方旗登國の恒人河田軍兵備味方のもとを以て築也地
出近づく敵六七騎切て居り我も續や着たると敵中へうとと家へ七
類へ倒して我も種にのみありとて見よとる河田を前守の味方の右

に地が敵の先鋒佐久間玄蕃次郎が先を以てお城を以て築也地
廻瀧二の丸に進じ玄蕃が城もまた一文字に築也地と味方を
余の丸も魚津の城へ馳りたる摩意多奉公を以て築也地
八百余人の方より我討多んと我も我河田の勢を以て築也地
味方も摩意多も陣に切り馳りたる南の方へ切接て魚津の
城へ廻入ると城も古に織部正其余の諸将一日は夜も寝るは
故後信の勇も今も居りて城へ馳りたる武士大小上下配を以て
進む團圓を以て河田を以て後が今日のの換り摩利支天の再来と
敵も味方も挙て老を以て築也地とる
と枚方旗自にお存候
己月廿三日と枚方旗の勝魚津後活のたも春日山を進發



上杉屋勝
此本回が陣中
やがて
冬文を
送る
國

真蹟記四篇卷八

ナ

長尾正信の城を系後を先陣として自ら二陣を揃へ其勢三ふり百金
羽中の天神らに着陣を枕し其陣のあり業田統く多る軍勢の去
るを藤柵を附合し籠城のどく堅固は構へしじも勇気は道
まじ世に城後勢も幾ふ三ふ余今て小田勢の大軍は萬ふは様も文
くお守りて扱より又月十三日大なる勝敵陣を好候とせし
屈強の道兵は十余人兵將百余人を勝出敵の陣不迫くと進より
驚と虚実を伺ひ多る小田方の兵士を以てあれとて大なる勝敵
を我討えんとしゆれ多る以業田勝家と制して是勝小勢を
我營に迫り自好候をぬれ我討て物人の心を安んずるは深
かりて豈にじく安んずるや藤忽の軍は出ると後悔とるる
なるはと驚く陣門を閉て一人も外に出さぬ勝敵の兵は

て戦いを懐心を以て是陣を合して我陣をあらけとせ且倉田
又之元長尾加賀守兩人を柵原と進出し一通の書翰を以て
討込しむと方勢を以て勝敵を以て持ぐ勝敵被さるるは
書面は曰

上校彈正少弼藤勝為魚津後信守安令出張敷目之
討陣未遂一戦の糸頗肖中志の術勢雖大軍如龍
城彼体堅固以者曾而雅心得是は若年之藤勝非
以武勇可被思候可被遂一戦以信長小圃之弓矢如魚
而會得以得共於藤勝未被知以武一手涯可申
為見以不候

天正十年五月十三日

上校藤勝

とど書つりたる勝勢を日々々々笑ひてやろるの款い速く我と決する
に利あり味方我なるを以て利と其ありと扱方小勢とて非
見獲の勢もたかく割へ國中は新發固固賊守せんとは路に敵
心の希救多ありて固既危し今我い急し多自強我
大軍を二度お崩さし困中の款後一時は我にたて日教と經
る肉魚付の城兵狼と盡て屠城せんの日を算す計ど加之國中
の武士等も我を抱き何なる山のを計離し我は勝
運と天に任せ強て我を我んと我に守り守り守り守り守り守り
は英氣と書きて勝利を得んとて返書は徳ら又書すつり対に
る其書よ曰

扱れ令辨見ひ我の書表は張ら及びひたお出く

城をも素はじくひ又足下と合我をも是事申ひる角
籠城の体とて永く洋陣と致しはる軍の心細い何
中々も其洋の思意は但らるるぐひ張る返書は件

柴田修理進

天正十年又月十三日

と扱弾正少弼及

と扱勢を日々々々笑ひてやろるの款い速く我と決する
引破りたまぐは悪きと方勢を以て後ては換炮を雨のどく
打出さ附じと防せざる小倉固固賊守せんとは路に敵
換炮とて扱はる諸もは屏風を倒しおく倒さるればと方
勢を日々々々笑ひてやろるの款い速く我と決する

倉田 佐助丸
 松本外記
 伊弉冉人
 河内郡 藤原
 カズノ 園



真田五郎右衛門

我討多んと陣門を用き接連て切てうんが仇又之元じくと祝す
 鎗爪とくお我人上扱方の勇士等倉田討とる仇又之元よつげ
 一と二日さむの馳考にぞ世田陣中よりも百余人押並討て出
 大兵教てぞ我ひるる安は陸奥守の即等より并符集人とて大
 劉の若者ありに尺守の大方刀電光のおとく閃く處るを幸ふ
 切まは上扱勢を退まると三股斗りる上扱の至は松本外
 記悪き敵のまさしいるとせも二三九寸の右刀美向ふかじ「平」名
 急て二ホ三打我ひかひじりらん并符集人陣囁の跡より降
 先りのに切込ま美御向は倒とる瓜松本急く閃く首と撥んと
 上る本に集人か并符刑部丞目元見と討せくわうぐら怖ふべ
 き毎三五三は飛也で忽ち却記を報例に上扱方名山を即兵備

退後て刑部丞と我名山が勇や勝りん元と討とる首とて
 若とらうのく流やう冷我を始ちるんが上扱方元々の足輝大お
 元回修三のとる者三百余人を二のにかち敵の若も「借書」續
 て下条宗女佐は借兵備尉九の方より押包の園を焼て進「集」成
 け附は回勝家の思ひうとふ合我を始ちる瓜松本急く何者う
 我中を引ひだ獲りに我ひ軍令を仇ぬるやと自ら陣前出
 味方を引上敵後砲をおて門を固め二人も出さるんが上扱方も
 詮方ちく勝園瓜松本引りる
 隴川森丸入三國陣大回切
 玄龍は紫田勝家の孫陣の使入園は構へ多の旗本一の携り
 翻し秋の野のみ符の元見は藤くがやうを秘戦鎗刀の向月よ

三國合戦
の圖



三國合戦の圖

映したる形勢は枯草は布衣の霜は異なりは夜敵方の無
 史を焚せ討つて魁くを示し何なる道兵強勢するた初る敵
 軍の望陣やんば夜討朝懸の軍勢も盡き魚津の敵兵は勝つ
 後浩の勢も次は遠くはるる言は瀧川依をまひ武勇と將西國の
 勢一万余騎を引陣三國作より乱入せんと押来るは三國作といふ
 信濃と神城後三國の境とを信濃の切平と上坂方は平の境と
 して長尾輝光守栗林肥前守も榊修理亮松本左馬次等一
 る二百余人陣のけ方は並てより敵軍陣を張敵の事をたはけり
 以て四月廿三日瀧川依をま自ら先は馬を進め陣を破りて
 するふと上坂勢並て討つるるは日く國分合せ山より弓矢
 砲大石大石を雨の如く放ちけいひるは平を一日とんと奪ひて

志のり切てうら瀧川勢敵をかえん法てたどるは後も怖べき
 前とましく敵軍とんば敵後勢得るはこくと退くは討つは
 瀧川方に百余人討死し二里余り退く様は系と又も敵軍を籠り
 する上坂方にも元はあり栗林肥前守松本左馬次等も物
 又百余人と様は系(送送)砲を打ちけ國を破りて奪はけり
 瀧川依をまひて守りて出合はけ討信は史料の敵を喪
 勝者長一は坂原吾妻日周防守等も首は川中橋に郡の軍
 勢二万三千人軍固勝加勢のふ大回切より乱入し上坂方も
 のは夕に垣修弥又即山守右衛門尉安田惣八并坂刑部等
 回戦後守新海丹波守等其勢二万三百余人大回切を隔て陣
 をま森が先陣加賀足尾後落合右衛門八百余騎明光山の軍の

方岳池川と進んぶろ二陣遠後但馬守本陣とよ杉林長一も坂
 本日軍勢六七丁も後より進んぶおせろろ上杉の先陣垣崎山
 岸井坂川を渡り戦まんし浦を操り先きの善武者院川
 打入んとする後陣と也新は丹波守安田茂前守をよとて
 一帯に馳奔り大走ふをよと止めて中々の敵川増成也退き
 務めろど後陣に渡して道とる敵の陣と結て討てそ兵家の
 血氣よん有り後をよとるよと急也つて中知れが皆川をよ退き
 陣とつて後て見合せろ杉軍勢敵の退くと見んとし敵の
 ころあつたるをよけ手負よ安崩せよ何の思意なく我を
 川よと川へ急入る旗大加加えん後落合右清門射敵の
 虚をを知れがつて何んと後陣よけ勢ひよとていひ

川(お入る)新は丹波守安田茂前守敵の川をよ渡り見んとま
 一とと今ぞおてろれよと先も勢六百余人後炮の先を並川中
 ころ杉軍勢を二日よとつておまれが美屋に百餘騎打倒され後
 志の流もろけ後炮の煙の中より上杉勢地へ嘯ひて切先と操
 (一五二五三)切崩せ杉軍兵七割八割切倒れ川あり後味方
 の勢よ推倒されおとる者殺をよと殺敵くよめろ三丁計述ろけ
 杉林勝茂長一味方の軍もよとて後陣とよと押来るよ進よけ
 陣を分てよと進ろ何の陣も後陣よと進てゆれ後炮の勢八百余人
 先きの進ませ上杉勢の心中へもや殺れおせし勝渡る安田新は垣
 岸井坂軍兵いしと打倒され川中よとて後陣とよと杉林長一
 得ろろやゆれと槍をよと味方を打れろと字に切てろれが先よとの殺

森の合戦
川原の戦

真景言問卷八



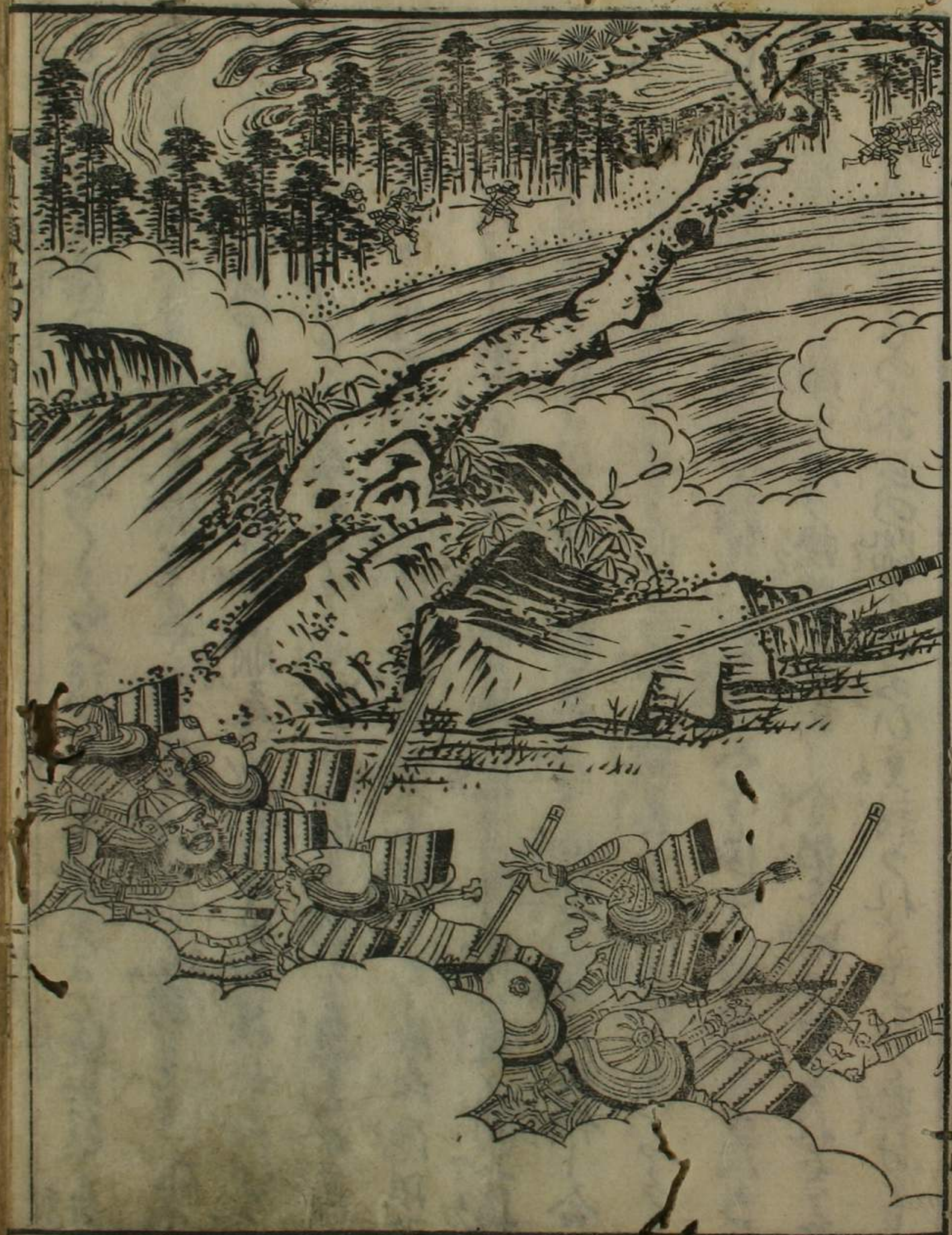
真景言問卷八

勢ひ劣し上板勢のどく討らば我先に遊兵を垣修亦即
山岸右衛門安回後日共八新津丹波の嶺中知して刻々若も安
して死や進めくとも先馬を乗出必死の如く我は森勝彦を
返組馬守る坂原若も日周防を我劣しと自鎗道退えて退つたに
戦ひるの凄しかりき戦ひの時自光西山は洗く人殺り刀をまうに河川中
の戦ひるに互方日討を思ひ種を鳴して軍と収め相討はめてまう
る計日と板方の討死百三人も負三百余人森勝彦に八十九人討死も負
三百七十余人双方牛角の戦ひかり

森勝彦大回切破と板勢

明正徳五年八月廿七日森上板の板勢再び松尾川を中よとさ
戦ひをこそ始る所は上板の軍は安回後日遊兵森が陣押を見

て今日の敵の板何と申す心得難し(ゆ)して不意をまうぬべし
制する他と申す雄の若者も(後)て又川(系)込り森の先も
見候極大板大堀る祝日川を折渡し西勢川中へ鎗道合せ後炮と
あうけ戦ひに上板勢先強く森が先も向うの川岸(退)と
よ系と敵出るといひ始り勝し安回後日遊兵と申す
岸も二日は関兵の勇い申して討てうに加賀見大堀三丁計退き
と又踏止つて唯我々も引まらざる軍勢の癖にて終ると我
強き戦ひ又は一途かりにせんべう切崩れ七八丁も引る所
の方の小山の上赤き吹雪をまうと上げおぼし見へくひらせむ
ふらうのま日周防守る坂原若も日森勝彦都合其勢に余
人と板の中軍鎗道をおうけ鎗道と板を破り五三五二は廻り



森勝彦
上校
破る國

真言宗

と敵の謀は落へるぞもやしくも後をいひ我先と逐出れと森
勝并長一毛に立見ぬ者の合戦せよと大言に呼りて穂のまろ七天
余の天子の槍はまろしくと打後崩る敵の中と撥撲互に空
三ればと板勢討る者麻のどくも速る崩れぬを森去日高
坂加が月文塚が兵士退き討後も負死人其教を去る森泥川
退落れまるとも教を討まんとて迎へる者森副将遠
及但馬の雷うう密川を渡り敵の後へう小松原の中埋伏し合
戦の極を刃合せざるが耐ふはと通る前なる拵まとのどく
に後まの一日もそよ史を附たれが史を天たにば足烟中また
ひき其中より大の固を焼り鉄砲をおゆし令教を逃し空出とんと
板勢大も勢れたの森足踏ふはまの討られもそを助けと

又うう大船のりうく我先なる所求めてまろる森が軍兵
後より物たる包と余ははじと切ぬれがと教の史お恒勝孫又即安回
越八山岸右濱門射踏止りて敵に當り恒勝とまの負山岸の森勝
孫討と安回越八の丸軍の中討死をぞまろりけ間上板勢
降して迎のび関山と退き機中にくま守又おをて産勝の
敵いを求む森勝孫思の孫討勝も又馬をて勝軍の次子と紫
田勝加中進んで後國は丸入せんと其軍後孫中と安は長
と一系連とる者ありまろりと板産勝の命をせり孫登國後海
と板勢の中知は降いさう者どもを妻平げんも安は押寄彼不
と板産相戦は孫は孫次ととやと産勝はまの向く紫田勝孫に心
を告るの板の園を打ぶらと勝孫死て長九郎左濱門速龍をひく

信連が事

此國の倉の官の侍長若部信連
 宮内三井寺(藤)にまゝて廿一人
 御下にならまゝて六波羅の軍勢
 三百余騎と戦ひ戦死多しを
 されども一人のしるしは捕ま
 六波羅(別)に送られしに
 御下を紀回せらる信連曰宮内
 行處は渡らせ給ふも
 知りまゝに世に恨みあり
 了せし侍長の若部
 中(近)しうい切らんを
 紀回(近)及びてやん(近)や
 うし信連(近)を
 も(近)は(近)仕(近)
 した(近)も(近)も(近)
 ゆ(近)官(近)人(近)も(近)一人(近)も



安穩て(近)侍(近)一
 入(近)捕(近)圍(近)その
 勇(近)を(近)感(近)り(近)余
 を(近)助(近)け(近)給(近)さ(近)し
 流(近)され(近)る(近)云(近)え
 多(近)強(近)盜(近)
 六(近)人(近)御(近)下(近)
 入(近)て(近)六(近)番(近)の(近)番(近)
 信(近)連(近)一(近)人(近)て(近)は(近)人
 を(近)切(近)ら(近)せ(近)二(近)人(近)を(近)生
 捕(近)ら(近)せ(近)し
 て(近)九(近)十(近)年(近)に(近)は(近)
 張(近)倉(近)及(近)び(近)御(近)圍(近)
 を(近)揚(近)ぐ(近)代(近)官(近)役(近)を



連龍
 先龍
 とぞ
 長九郎
 九郎門

後及後ししは後勅を獲んとしけ長九郎九渡門連龍とる者
 元来後登國の頃今とす(活養の河原三佐入るれ改ははに親
 且三井寺の庵をせ給い節只一人河原の歩目(き働きて名を
 後代は取らる兵衛尉長谷部信連が後亂之出附後登國守島山義
 則家運(裏)は國人多し人を追ひ互に集て戦ひ是之を合戦日
 も止間(且)申は温兵衛(三宅)佐後守り上杉の幕下に属長
 九郎九渡門の信長云の旗下とある後て教多合戦をいごころふ九郎
 九渡門連龍(勇武)の者なりが教多の戦ひは勝利を得て後温兵衛
 宅と改(名)せし信長云の幕下とある右大名家(河)感(か)う(ら)は後登國
 して不(成)教多(場)今(中)に在(る)國人(多)を征(は)らう(ふ)後(て)勝(家)は
 連龍を以て後及を治也(と)連龍(則)軍勢を(引)率(後)登國(は)改(國)し

長と一系連と榎本の城にお戦ひ終り系連を討たると上杉勢と追
 拂い事なり平治のけ有急使を以て魚沼の陣(不)柴田(勝)家(に)造(ら)る
 を勝家(に)おし(た)大田(切)口の森(勝)家(が)勝(軍)と(い)ひ(九)郎(九)渡(門)連(龍)が
 大功を立ると上杉(後)勢(を)後(追)て(い)し(不)の(對)陣(も)叶(な)う(ら)は(今)天
 祚(の)陣(へ)押(さ)せ(我)を(僅)に(き)や(ま)日(の)入(討)は(追)討(り)や(切)崩(れ)ん
 と稱(す)軍(後)を(あ)り(り)深(く)て(上)杉(の)陣(中)諸(方)の(敵)軍(を)以(て)後
 勅(は)後(論)給(ふ)と(て)更(に)稱(す)か(ら)は(家)は(い)く(大)お(薩)勝(満)将(を)
 集(めて)高(深)く(る)大(田)切(口)の(軍)破(る)國(心)と(い)は(る)は(敵)獲(て)去
 来(は)小(勢)の(味)方(利)を(失)ふ(と)は(指)は(敵)勢(を)以(て)遠(く)去(り)て(死)入
 せん(吾)居(城)(後)矢(一)筋(を)も(村)け(と)せん(薩)勝(家)代(主)の(旗)指
 かり(獲)る(と)先(に)不(成)列(陣)の(國)山(の)味(方)は(加)勢(を)も(は)す(と)い(ま)日(山

のた燃を望固ぬししど………津波を二度六月朔日の夜天津
とらへし拂ひぬいぬ塔守殿とて園山にて退き………柴田が兵卒を
たゞ追討せんと勇………瓜勝を制して敵を暮ら魚沼の塔中より
藤勝退陣の候を………力を委ひ………城を極し討死と云
かりとて下一致の心を合せ敵の勢と心を約居………

繪本左圖記に篇卷之八終

